

25時行動委員会・富山

通信 3

2015.7.29

25時行動委員会・富山

(090-7744-0122 藤岡)

E-mail:25h.action@gmail.com

Url:http://25h-action.blogspot.jp/

私・たちの告知ー列島を宰領する国家への」(最終版)

およびその〈註〉

「敗戦70年：私・たちの告知 ーこの列島を宰領する国家への」

2015・7

25時行動委員会(25h.action@gmail.com)

「わが祖父たちの奪ったもの、
わが兄弟たちの掠めたもの、
ついに奪いえず、掠めえなかったもの」
(中村稔「器物ー4 高麗」)

アジア・太平洋戦争敗戦から70年、日本を生きる私たち、「わが祖父たち」に連なる私たちは、アジアにおいて「祖父たち」が「奪ったもの」・「掠めたもの」がなんであったのか・なんであり続けているのかを、なお明かしえないでいる。そのことによって、歴史の闇がなお未開のままに封じこまれている。私たちが宰領する国家は、そのことを忘れ果てたかのように、この70年にいたる時間をアメリカの巨大な傘の下「経済（成長を至上とする）大国」という時間として現出させてきたし、今もなおその時間の更新への野望を捨てきれず、さらにはそれがかつての「帝国」の夢の再生で裏打ちできるかのような幻想に囚われ続けている。

アジア・太平洋戦争敗戦から45年余の後に、「冷戦」の綻びをぬって「ついに奪いえず、掠めえなかったもの」を抱き続ける長い沈黙の果てから、「歴史の闇」をくぐって、「わが祖父たち」が「奪ったもの」・「掠めたもの」を償うことを求めるアジアからの〈声〉が立ち上がってくる。そして敗戦から70年の後においてもなお、「祖父たち」に連なって日本を生きる私たちに、「あなた方はどうするのか、あなた方を宰領する国家をどうするのか」と〈問い〉続けている。私たちは、その〈声〉にうながされ、「歴史の闇」に通底する私たちの内なる闇から解き放

たれることに手をかけながら、なお私たちを宰領する国家をしてその〈声〉に向きあい応答させることができていない。

「わが祖父たちの奪ったもの、
わが兄弟たちの掠めたもの、
ついに奪いえず、掠めえなかったもの」

アジア・太平洋戦争敗戦から45年余の時間の後に、綻びながらなお「冷戦」下にあるアジアから立ち上がってきた〈声〉にうながされ、私たちは、とりかえしのつかないことをどうとりかえすのか、「わが祖父たち」のおかした「罪」に覚えるやけつくような「羞恥」をどうするのかという問いの前に、私たち自身を立たせようとする。そのことで私たちは、私たち自身を、「わが祖父たち」が「奪ったもの」・「掠めたもの」の上に成るこの日本を、再審しようと身もだえしながら、70年後にもなお、私たちを宰領する国家にその「奪」い・「掠めた」ことの始原から帰結にいたる「責任」を果たすことを迫ることができておらず、そのことで私たち自身がなにを喪ってきたかを突きつけることができないまま、アジアと出会い損ねている。

アジア・太平洋戦争から70年、私・たちは、私・たちが覚える「羞恥」を「羞恥」として据え、私・たちの「ついに奪いえず」・「掠めえない」ものがなんであるのかを〈声〉にする。列島を宰領する国家が「わが祖父たち」が「奪」い・「掠めた」ことの「反省－究明－謝罪－補償」を果たさず、古来からの最大の「他者」であるアジアを喪い続けるならば、私たちの〈生〉の根が枯れていくことを、そのことを肯んじない私・たちはこの列島の「住民」として、国家がなお「住民」として遇しきれないアジア出自の列島の住民とともに、列島をアジアに開き、〈共にアジアになる〉こと、米中複合覇権からの〈アジアの解放〉へ向けて、私たちのではなく国家の根を枯らす路、列島に存在する全ての住民が「共和」する列島社会を創出するにいたる路を遠くまで行くことを、列島を宰領する国家に告知する。

●「私・たちの告知」への註

〈註・1〉

アジアから求められているのは「国民」としての応答である。しかし、私・たちは「国民」として「応答」したいわけではない。では、「市民」として、と立てられるか？このたびの「戦後70年談話」に対抗して「市民」として立てているところは多い—大阪～東京—埼玉～愛知。しかし、自分を「市民」と立てることの居心地の悪さとは別に、列島居住の在日外国人のことをおいて、「市民」と立てるわけにはいかない

「国民」としてではないということ、「非国民」としてと、理念的には言う事は可能だろう、しかしそれは当人以外には説得性をかけ、「応答」にはならない。ここで「列島住民」としてということが、浮上する。しかし、それは直ちに列島居住の「日本国民」以外の「住民」と

いう問題に突き当たる―無邪気に「住民」と立てることは、「市民」と立てることと同様の問題に突き当たる

##しかし、間違いなく私・たちは「列島住民」なのだから、問題は如何に自己否定＝自己解体的に「住民」として立つかということ、言い換えれば未生の「列島共和社会住民」として立つかということになるのではないか、つまり、現存の列島在住の諸住民とともに「列島」を「共和社会」として割り出していく者として立つということになるのではないか

##そうだとすると、どういうスタイルにするかを考えなければならない―つまり、今回「戦後70年私達の談話」に参加した場合のように、「敗戦70年私・たちの告知」とするか、それとも、「敗戦70年：未生の〈列島共和社会憲法・前文〉への〈前〉註」とするか、まだ他のスタイルがあるか？

〈註・2〉

##以上では、焦るあまりいかなる「主語」においてかという問題にのめりこんでしまったが、本来ならばまず第一に「70年談話」に対抗するのが、「主語」はどうあれ、私・たちのなんらかの「言説」であることに、あらためて注意することから、始めるべきだろう。私・たちの言説はいかにして、この列島を宰領する国家の言説に対抗・対峙しうるか？

##ここで私・たちを勇気づける例を引いてみたい。それは、去る4月に行われた翁長沖縄県知事・安倍首相会談における翁長知事の言説である。同知事の一步たりとも引かぬ言説のつよさを裏づけていたのは、沖縄にたいする軍事権民地支配、それに抗い続けてきた沖縄の人々の闘いの歴史の「召還」（仲里効）ではなかったか。

##「70年談話」対「それに抗う私・たちの言説」―この言説の力による政治において、私たちに「召還」すべき歴史はあるか、翁長知事のように誇るべき歴史はあるか？この間いの前で、私たちは自らの敗戦／戦後70年を改めて振り返らざるをえない。―この70年の時間のなかで、私たちは、アジアからの声に対して、どのように応えてきたか？

##私たちの誇るべき「平和憲法」の、それを護るべきものとしてきた私たちの営みの、「平和と民主主義」という理念の70年の歴史は、「召還」すべき歴史ではないのか？もしそれらの歴史が「召還」すべき歴史であるのなら、なぜ今ここにきて、「70年談話」ということになり、それに対する「対抗言説」ということになるのか？

##こうして、私・たちは自らの70年のありようという根底的な問題に膺くことになるのであり、私・たちにあり得るのは、わが身を刺しぬくことが同時に列島を宰領する国家を刺しぬくことであり、列島を宰領する国家を刺しぬくことは同時にわが身を刺しぬくことであるという〈場所〉に立つ、そのような〈場所〉に立つことが可能となる主体へ転生する以外ない。

##ここに、その〈場所〉にたつことのありように応じて、私・たちが「70年談話」に対して「私・たちの告知—列島を宰領する国家への」という対抗言説をとらざるをえない所以がある。その言説の主語は、私・たち自己否定的に「列島住民」となろうとする、列島に存在する他の「住民」と「共和」しあうものとして列島社会を構成しようとする者と、指定される。そこへいたる私・たちの思考錯誤については、〈註・1〉参照

〈註・3〉

##上で私・たちが「告知」という言説をとらざるをえない所以にふれたが、その点についてもう少し説明しておきたい。敗戦／戦後70年たっても私—たちの「祖父たち」のまた「祖父たち」が行ったことが「罪」として罰せられることもなく、列島を宰領する国家がその「責任」を負い、「償い」を果たすことがないということが、私・たちにもたらすのは、なによりも「蓋恥」・「恥ずかしさ」である。

##改めて言うまでもなく、その「羞恥」・「恥ずかしさ」は、自らに注がれる「視線」があること、その「視線」を70年にわたって送り続けているアジアの人々という他者が存在していることを、私・たちが認識している、さらには、承認しているからであるにほかならない。にもかかわらず、この列島を宰領する国家はこの70年の間、アジアという他者を喪いつづけてきたのであり、そのことで私たちの生の根を枯らしてきたのである。

##生の根が枯れる、それは、私たちが自らについての「名誉」・「品位」・「尊厳」などを喪うという自覚もないままに喪うことではないか。そして、それは翻って他者のそれを喪わしめることについての自覚を喪うことではないか。私・たちはそのように自らの生の根が枯れることを肯んじるわけにはいかない。したがって、私・たちは自らの手で自らの生の根が枯れることから護り、この列島の土に豊かに張ることにつとめなければならない。自らの生の根がこの列島の土に豊かに張るとは、私・たち自身がこの列島の「住民」にナルことではないか。

##このような意味において、私・たちの対抗言説は「告知」というスタイルであらざるをえないのであり、同時に、その「告知」はその内実においても、さきにふれたように、私・たちがこの列島に現存する諸住民とともに「列島共和社会」を構成する路を遠くまで行くことを告げるものであるのだが、その「とともに」ということが、「他者としてのアジアの人々・アジア出自の住民に対して自らを開くこと、その協力・共助によって」ということであることは改めて言うまでもないだろう。

##私・たちは、「列島共和社会住民」に成り変わりあう路を遠くまで行くことのなかで、人に無限に〈越境〉する可能性をひらくしくみを、未生の「列島共和社会住民」への〈契約〉として創り出すのである—これが、敗戦70年の「首相談話」に抗う「私・たちの告知」の核である。

私・たちは敗戦70年のこの夏、この列島が「首相談話」に抗う多種多様な言説によって満ちあふれ、そのざわめきが周囲の海をこえわたり、アジア・太平洋地域の、さらには世界の人々ととどき、「隔ての海」が「結びの海」に変わることを、そして、いつの日にかその海を世界の諸地域の「住民」が「ピープル」として行き交うようになることを、心から願っている。